

## 平成 23 年度 活動報告

メータオ・クリニック支援の会(JAM)の活動は会員の皆様からの会費によって成り立っています。

平成 23 年度は 55 名の賛助会員様、58 件のご寄付により、日本事務局が総額 1,879,125 円をお預かりし、その約 54%(1,015,071 円)を直接クリニックへ拠出したしました。また、海外派遣費として約 31%(587,300 円)、国内事業費として約 3%(53,895 円)を支出いたしました。

残りの約 6%(113,790 円)を翌年度以降の活動のための物品に、約 7%(137,263 円)を日本国内での消耗品・備品等の需用費等に充てさせていただきました。

### 収入の主な内訳

一般収入	賛助会員費 (55 名)	176,350 円
	正会員費 (17 名)	127,750 円
	寄付 (24 名 58 件)	794,775 円
特別収入	敷島製パン労働組合	330,000 円
	みつばち倶楽部	20,000 円
	書籍	32,030 円
	オリジナル T シャツ	112,500 円

JAM では、より多くの支援がミャンマー／ビルマの移民労働者や孤児に届くよう、活動の効率的な実施と JAM の活動にご理解をいただくための広報活動に努めています。

当会の活動に引き続きご理解を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### 平成 23 年度における活動の要旨:

発足 4 年目となる平成 23 年度は、現地スタッフとして看護師を 8 月から派遣し、クリニックの外科病棟において技術支援を行ったほか、院内感染予防活動を実施しました。また、クリニックと共同で学校保健プロジェクトを実施し、当会が健康モデル校として支援する Hope Learning Center においては現地のニーズをもとに校舎の改築を行うなど、子どもたちが健全に学ぶための環境整備に努めました。

国内活動においては「グローバルフェスタ JAPAN 2011」へ 2 回目の出展を行い、昨年に引き続き広報活動に力を入れました。また、平成 23 年度は新たに 4 名の正会員を迎え、組織の充実が図られる年となりました。

さらに昨年 6 月、メータオ・クリニックから避難児童のための緊急支援を呼びかけるメッセージが届いたことに伴い、日本での寄付金窓口として複数の団体で基金を立ち上げ、当会も賛同して寄付を募集。9 件、総額 46,000 円の支援金を共同基金へ送金し、現地の情勢に応じた緊急支援を行いました。

2012 年 3 月 31 日現在、運営スタッフ 19 名(うち有償現地スタッフ 1 名)、賛助会員 41 名です。

# 平成 23 年度 活動報告

## 活動報告:

### 1) 日本事務局の活動

#### ① 人材派遣と育成

平成 23 年 8 月より前川由佳(看護師)を派遣し、主に外科病棟を中心に技術支援を行いました。今年度のスタディツアーは東日本大震災に伴い自粛中止とさせていただきましたが、滋賀医科大学の国際協力サークル等からのスタディツアーや視察の依頼を受け、現地および国内スタッフが同行しました。このほか、多くの訪問者がクリニックを直接訪れ、支援の現場を見て感じていただく機会をサポートしました。現地訪問の支援を通して国際保健分野での活動の場を紹介し、情報共有を図ることにより、国際保健に資する人材の育成を行いました。

#### ② 戦略的な広報活動

一般向けにインターネットやリーフレットによる広報活動を行いました。毎月1回会報を作成し会員へ配信するほか、ホームページで公開しました。

イベントおよび書籍による広報活動の詳細は以下のとおりです。

2011/9/ 日本ビルマ救援センター発行『アリンヤウン』へ執筆(田辺、秋山、前川)  
2011/10/1・2 グローバルフェスタ JAPAN2011 に参加し、展示ブース、ワークショップを開催  
ワークショップ「スタディツアー参加者から見た国境の難民診療所・学校とビルマ/ミャンマーからの移民・難民」(発表者:渡邊)

新聞、雑誌で取り上げられたものは以下のとおりです。

・体験派医療人マガジン Lattice 2012 「医療という『絆』」 Lattice 各種団体紹介

#### ③ 総会および帰国報告会の開催

6 月に総会および活動報告会を同時開催しました(参加者 21 名)。活動報告会では、当会の秋山剛より「ミャンマー／ビルマ移民児童ための学校保健事業について」報告しました。また、平成 22 年 11 月から平成 23 年 2 月まで実施したビルマ/ミャンマー緊急支援の報告を田辺文が行い、現在赴任中の前川由佳が派遣前挨拶を行いました。

#### ④ 定例会の開催

東京で月1回スタッフが集まり、スタッフ間で情報共有や支援方針の決定、イベントの準備等を行いました。現地スタッフおよび遠隔地に滞在するスタッフとスカイプ(インターネット電話)でつなぎ、互いに生の声を聞きながら、現状の把握をもとに意見交換や検討を行っています。

⑤ 物資の支援

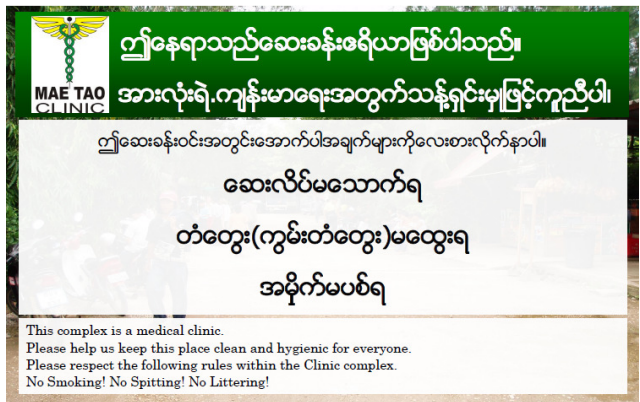
文房具・衣料品	文房具、玩具、衣類
医療器械	手術用器具(鉏 鉗子類)

2) 現地事務局の活動

① 院内感染対策

メータオ・クリニックでは年間外来患者数 148,374 人、入院患者数 10,726 人(2010 年)とタイ・ミャンマー／ビルマ国境地帯の多くの患者さんを支えています。2005 年に院内感染予防チームが結成されて以来、現地スタッフはこの感染予防チームに参加し、アドバイザーとして院内での感染予防対策の活動に取り組んできました。院内感染対策チームでは、医療従事者に対する院内感染予防訓練の実施、標準予防策のガイドラインに基づいた医療スタッフの行動調査および指導、設備の充足などを通じて院内感染の予防に努めています。

平成 23 年度は、外部評価としてメータオ・クリニックから患者の受け入れを行っているタイのメーソット病院より院内感染予防に関しての様々な課題が挙げられたことを受けて、さらなる院内感染対策の強化が求められる年となりました。この外部評価の結果をもとに感染対策チームは、現状の評価、活動内容の見直しを行い、新たな計画の立案を行いました。2012 年 1 月よりみつばち倶楽部のご支援を受けて、感染予防に関わる設備・物品の充足やポスターの作成を行い、手洗い環境、院内環境の改善を行いました。また、イベントとして手洗いキャンペーン、環境改善キャンペーンを取り入れ、クリニックスタッフや患者へ感染予防の重要性を訴えるとともに、指導・教育を行いました。なお、これら活動の立案、計画、実施は常に院内感染チームリーダーを中心に進め、チームメンバーと共に進めるように配慮することで、クリニックスタッフの自主管理能力の向上にも努めています。



手洗いポスターと院内環境改善ポスター

## 平成 23 年度 活動報告

### ② 学校保健支援

タイ・ターク県には、ミャンマー／ビルマ移民の児童ための教育施設が 74 校存在しています。当会はクリニックと共同で学校保健プロジェクトを行っています。初等学年を有する学校に対して学校保健評価を実施。優秀校の表彰式を通して学校保健改善の動機付けを行うと共に、国際 NGO や現地のコミュニティー組織と学校保健改善の評価を共有しています。

平成 23 年度は移民学校の運営・教育を支えている現地コミュニティー組織の再編成・移行期となったため学校運営への支援が安定しない状況が続きました。不安定な学校運営は学校保健活動にも波及し、保健活動に集中して取り組めない学校が多く見られました。現地スタッフは、学校訪問時に聞かれる先生方の不安に対し、その対処方法を助言することで学校運営を安定させるよう図り、学校保健活動へ取り組める環境づくりに努力しました。また、メータオ・クリニック学校保健チームと協力し、移民学校児童の栄養調査を行いました。普段の食事内容の聞き取り調査と学校での昼食内容の調査から、多量の白飯とわずかなおかず内容という偏った栄養摂取状況が明らかになりました。同時に行った身体測定からも、多くの児童が成長曲線の標準値を満たしていないことが確認されました。栄養不良は児童の発育を妨げるのみならず、感染への抵抗力を弱めることから、栄養支援への介入の必要性が明らかになりました。

また、敷島製パン労働組合からのご支援により、モデル校のひとつである Hope Learning Center の新校舎を建設しました。丸竹の柱にコンクリートブロックの壁、トタンの屋根で造られた旧校舎の老朽化は激しく、児童はぐらつく柱で支えられた校舎で、穴の開いた屋根から滴る雨粒を避けての勉強を余儀なくされていました。また、寄宿児童の増加により、寄宿スペースの確保が求められました。2011年11月、鉄筋コンクリート製でグラスファイバー素材の屋根を用いた頑丈な造りの校舎が完成し、安全でより適した学習環境を確保することができました。

### ③ 外科病棟での勤務を通じた技術支援

メータオ・クリニックの外科外来・病棟は年間 7,509 件(2010 年)の疾患件数を抱えています。主な疾患は、やけど、事故による外傷、皮膚や皮下の感染症などであり、鼠径ヘルニア(脱腸)などの疾患には外科手術も行われています。これらの外科処置は、決して衛生的とはいえない環境下、手順のもと行われている場合が多く、実際に感染を疑う患者も多く見受けられます。

現地スタッフは、これら外科処置の手順を評価、問題点を抽出し、より衛生的で適した処置手順となるように、処置物品セットの作成、使用方法の指導と運用のシステム化に努めました。また、病棟スタッフへの講義を通して、外科病棟の状況とニーズに即した知識と技術の向上に努めました。